

肉声

「肉声」に寄せて 杉本博司

ジャン・コクトー

ジャン・コクトーの一人芝居「声」は1930年頃のパリを舞台に書かれた。携帯電話の普及した現代では考えられないことだが、電話は混線を極めた。肉声が電気信号となって、遠くにいる恋人へと伝わっていく。人の心が機械を通して伝わるという近代社会の悪夢が、この頃始まったのだ。

私はこのコクトーの「声」を、日本の昭和15年に置き換えてみようと思った。そしてモチーフとして建築家堀口捨己の設計したモダニズム邸宅に住む愛人を設定した。堀口は実際、資産家の施主の為に妾宅を設計している。そこに住む愛人は、その趣味がフェンシングと水泳という、当時のモダンガールだった。私は平野啓一郎氏に「声」の翻案と脚本化を依頼した。はたして完成した台本は原曲から遠く飛翔したものとなった。私はこれを翻案ではなく本歌取りと呼ぶことにした。本歌取りとは時に原曲を裏切り、別次元に昇華させる、日本文学の古典に伝わる麻薬的手法だ。

この年、日本は建国二千六百年を祝う祝祭ムードに酔いながらも、国の滅び行く予感も漂っていた。はたして電線で結ばれる男女の声は、人間の魂の声を伝えるだろうか。人間の魂は電気信号化できない。さすれば残るのは「肉声」のはずだ。

平野啓一郎の「肉声」のジャケット

「肉声」梗概 平野啓一郎

ジャン・コクトー

1940年の晩夏。――

女は、ひとしきり、自宅の庭のプールで泳いだあとで、ほんやりと蓄音機に耳を傾けていた。ル・コルビュジェ風の本格的なモダニズム建築。世に妾は数多あれど、こんな妾宅はまたとない。そこは、二人の男女の美と欲望の人工楽園だった。

日米開戦前夜、不安な予感に苛まれつつ、二人は電話で、いつものゝ風変わりな遊び、に耽る。……

そして、1945年3月。

度重なる空襲によって、焼け野が原となった東京で、彼らは再び、電話口にいた。

世界の破滅を予感し、肉体への渴望を、愛へと昇華しようとする男。その時、女の「肉声」は、彼女の心の「虚」と「実」を、金色の言葉の糸で縫い合わせてゆく。そして、語られた思いがけない言葉。

彼女の真情は、一体、何だったのか？
そして、二人の運命は……？

平野啓一郎

ジャン・コクトー

◎開催日時	主催:	公益財団法人小田原文化財団
2016年11月	企画制作:	公益財団法人小田原文化財団
25日 金 19時開演	協賛:	CoSTUME NATIONAL
26日 土 14時開演		株式会社カッシーナ・イクスシー
18時開演	原案:	ジャン・コクトー
27日 日 14時開演	構成・演出・美術:	杉本博司
	作・演出:	平野啓一郎
	主演:	寺島しのぶ
	節付・演奏:	庄司紗矢香

平野啓一郎

ジャン・コクトー

寺島しのぶ

photo: Shin Suzuki

構成・演出・美術 | 杉本博司

1948年東京生まれ。立教大学卒業後渡米、1974年よりニューヨーク在住。徹底的にコンセプトを練り上げ、精緻な技術によって表現される銀塩写真作品は世界中の美術館に収蔵されている。近年は執筆、設計へも活動の幅を広げ、2008年建築設計事務所「新素材研究所」を設立、IZU PHOTO MUSEUM、MOA美術館(来年2月リニューアルオープン予定)などを手掛ける。主な著書に『空間感』『現な像』『アートの起源』。古美術、伝統芸能に対する造詣も深く、演出を手掛けた『杉本文楽 曾根崎心中付り観音廻り』公演は海外でも高い評価を受ける。今秋、東京都写真美術館にて個展開催。1988年毎日芸術賞、2001年ハッセルブラッド国際写真賞、2009年高松宮殿下記念世界文化賞、2010年秋の紫綬褒章を受章。2013年フランス芸術文化勲章オフィシエ章受勲。

杉本博司の「肉声」のジャケット

平野啓一郎の「肉声」のジャケット

作・演出 | 平野啓一郎(小説家)
1975年愛知県生まれ。北九州市出身。京都大学法学部卒。1999年在学中に文芸誌「新潮」に投稿した『日蝕』により第120回芥川賞を受賞。以後数々の作品を発表、各国で翻訳紹介されている。2004年文化庁の「文化交流使」としてパリに滞在。2008年より三島由紀夫文学賞選考委員、東川写真賞審査員を務める。美術、音楽にも造詣が深く、幅広いジャンルで批評を執筆。2009年から7年間日本経済新聞の「アートレビュー」欄を担当。2014年フランス芸術文化勲章シュヴァリエ受章。著書は小説『葬送』『滴り落ちる時計たちの波紋』『決壊』(芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞)『ドーン』(ドゥマゴ文学賞受賞)『透明な迷宮』他、エッセイ・対談集に『私とは何か「個人」から「分人」へ』『『生命力』の行方～変わりゆく世界と分人主義』等がある。最新作は、小説『マチネの終わりに』。

平野啓一郎

寺島しのぶ

主演 | 寺島しのぶ(女優)
1972年京都市出身。アプティバ所属。大学卒業後、文学座を経て、舞台、テレビドラマ、映画など多方面で活躍。2003年「赤目四十八瀧心中未遂」、「ヴァイブレード」で国内外多数の映画賞を受賞。2010年公開「キャタピラー」では日本人として35年ぶりに第60回ベルリン国際映画祭銀熊賞を受賞。舞台では、2010年「血は立ったまま眠っている」(蛭川幸雄演出)、2015年「禁断の裸体－Toda Nudes Será Castigada－」(三浦大輔演出)、2016年「アルカディア」(栗山民也演出)など話題作に多数出演。今秋には『肉声』公演の他、映画『秋の理由』、『はくのおじさん』公開中。2017年には、NHK福岡ドラマ『たからのとき』(1月放送予定)、映画『母』(1月中旬公開予定)、舞台『座頭市(仮)』(2月上演)・『OTHER DESERT CITIES』(7月上演)が控える。

平野啓一郎

 節付・演奏 | 庄司紗矢香

1983年東京都出身。1999年、第46回バガニーニ国際ヴァイオリン・コンクールに同コンクール史上最年少かつ日本人として初めて優勝。2004年ケルン音楽大学卒業後はパリに居を移し、ヴラディーミル・アシュケナージ、シャルル・デュトワ、チョン・ミョンフンといった世界を代表する指揮者たちと共演を重ねている。サンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団、ウィーン交響楽団、NHK交響楽団などのコンサートに登場する他、室内楽活動にも力を入れている。また、2015年のメナヘム・プレスラーとの共演をライブ収録した『《雨の歌》LIVE モーツァルト・シューベルト・ブラームス』他CDリリースも多数。2015年、第57回毎日芸術賞を受賞。使用楽器は、1729年製ストラディヴァリウス“レカミエ(Recamier)”。アートにも関心が高く、油絵の個展を開く他、近年はアートとコラボレートしたプロジェクトにも取り組んでいる。

平野啓一郎

ジャン・コクトー

演出助手:	桐山知也	宣伝広報・制作コーディネーター: 稲益智恵子
照明:	杉本公亮	
音響:	尾崎弘征	票券: 翠-sui- 榑梨衣
舞台監督:	齋木理恵子	制作: ホイル治子
舞台監督助手:	大塚聖一	岡村滝尾
技術監督:	熊谷明人	藤井さゆり
		大木良美
小道具:	山下恒彦	
		プロデューサー: 足立寛
ヘアメイク:	片桐直樹(EFFECTOR)	
スタイリスト:	井上正子	制作協力: 世田谷パブリックシアター(公益財団法人せたがや文化財団) ギャラリー小柳

映像:	長谷川一行	Sugimoto Studio
		オカムラ&カンパニー

平野啓一郎

ジャン・コクトー

寺島しのぶ

photo: Shin Suzuki